

名誉館長館話実施報告抄

新野直吉*

金沢 秀之助・矢田 津世子・小牧 近江・澤木 四方吉・井上 廣居・安成 貞雄

はじめに

平成18年度は、元の如く講堂において「秋田の先覚記念室」「菅江真澄資料センター」に関する12回の館話を行った。例によって前半の6人の先覚についての5月12日(金)金沢秀之助・5月26日(金)矢田津世子・6月9日(金)小牧近江・6月23日(金)澤木四方吉・7月7日(金)井上廣居・7月21日(金)安成貞雄の6回分の館話を文章化して報告する。

金沢 秀之助

明治27年(1894)12月1日、平鹿郡横手町大町上丁30番地に栄四郎・ナヲの長男として誕生した秀之助の家は、「金圓」を屋号とする魚屋であった。祖父酉之助が圓五郎を称していた通り代々の襲名であった圓を、名字の金沢と組み合わせて、この屋号は成立していたものと認められる。尚金沢の訓みは「かねざわ」であり「かなざわ」ではない。明治29年の三陸沖地震の海難で持船を失ったため、魚屋から太物屋に家業を転じた。

長男坊が多くの場合にそうであるように彼も祖父母に可愛がられたが、特に女丈夫の表現が合うほどにしっかりした祖母キワに、日常の外出行動にも伴われた。祖母は名所旧蹟に導いただけでなく、社寺の境内の朝掃除に同行体験させた。手伝っている中で、奉仕とか責任とかということを体得し、あるべき地域社会での実践道徳を彼は身につけたのである。基本的な人生の守則を祖母の庭訓で得たことは大きな幸せだったと考える。絵は子供の頃から上手に描いたという。

金沢の作品について、秋田県立近代美術館では平成12年(2000)10月中旬から12月中旬まで「金沢秀之助展」を開催したが、その際の『図録』には小笠原光(現副館長)・金沢資子両館員編の年譜が附されている。金沢資子学芸主事は「金沢秀

之助の軌跡」なる伝記解説文も載せているが、同女史にとって秀之助は大伯父で、祖父準二郎は兄が芸術家になったので金圓の家業を嗣ぎ、その孫なのであるという訳なので、文章には深い味わいが込められている。

明治41年(1908)秋田県立横手中学校に入学するが、美術や文学に関心が深かったという。彼が中学生であった頃、横手町のキリスト教会の牧師に詩人の山村暮鳥が赴任した。秀之助は同級生の細谷千之と一緒に暮鳥を訪問したと年譜にある。

暮鳥が詩人であることは周知の通りであり、中学生の頃にその作品を読み、土田八九十(はくじゅう)という名であることを知った記憶はあるが、牧師であることは知らなかった。調べてみると、群馬県出身で神学校出身であることが明記されている。秀之助たち明治の若者の近代詩やキリスト教に関する心の動きを物語っているように思える。

中学生時代、彼自身の「修学旅行の二日」という、同窓会誌「阿櫻」に寄稿した文に依ると認められる、平泉研修旅行についての年譜記録がある。それによると、明治44年(1911)10月23日横手から湯田の杉名畑まで出かけて前泊し、24日朝7時に出発平和街道を東に進み、和賀仙人・横川目を通り、午後2時45分黒沢尻に到着した。

5時31分発の汽車で南下し一関に泊り、25日に午前7時頃一関発で平泉に向い、中尊寺を廻って、黒沢尻に戻るという旅程であったという。当然また湯田温泉あたりで後泊したのであろうと思われるが、帰宅だから夜間行軍をしたのかもしれない。

実はこの道は、石井露月についての昨年の館話で、明治26年(1893)8月に露月の祐治少年が母親と湯田温泉に湯治に出かけ、泊ったその宿に正岡子規が泊っていたが、お互に知らなかった話をした。その子規には「はてしらずの記」がある。子規は秀之助と同じ道を歩み「近国無比の勝地」なり

* 秋田県立博物館

と評していたのであるが、文士には評価されても、中学生には唯難路の行軍だったのかも知れない。

平泉見学なのに平泉ではなく一関に泊まったということは、平泉には一関のような適当な宿がなかったのかと思われる。金沢の修学旅行からは30年余隔てた話であるが、旧制中学を卒業した昭和18年(1943)夏、筆者も1年上級の常磐中学出身の上級生と朝に福島県浜通りを、常磐線の列車で出発し、仙台乗換え東北本線で平泉に向ったことがある。実は大雨があって小牛田以北は不通箇所があり、石越から一関までは線路上を歩いて夕刻平泉には着いたが、宿が見つからず、中尊寺では断られ、毛越寺に宿を乞い許されたことがあった。

とはいっても同情で学生2人を畳の上に寝させて貰うという一夜であった。持参の握り飯は、昼の分までであり、残っていても饅えて食べられないから、当然食物は無い。しかし幸いにも門前の土産物屋というか出店の中で、「干し餅」を売っていたのである。何十銭であったか今覚えてはいないが、2人でそれをボリボリと嚙って間に合わせたことがあったのである。

大正2年(1913)中学校を卒業した秀之助に家業を嗣げとの話もあったのに、絵の修行に上京することができたのは、祖母キワの「好きな道に進ませたら」の理解ある言葉によってであった。家業は弟(次男)準二郎に嗣がせて、彼自身は希望の道に向い進むことができたのであった。3年(1914)20歳にして本郷洋画研究所に通うことができた。この研究所は岡田三郎助・藤島武二の設けた絵の塾である。

大正4年東京美術学校予科に入学し、東大赤門前の本郷家に下宿していた。この下宿の主人は大曲出身であったし、横手中学同期の「三田文学」編集に関わることになる七尾嘉太郎も下宿していた。彼七尾こそ水木京太で、大正8年慶応大学を卒業する。よく知られる声優七尾伶子はその長女である。他にも後年東京都知事になる東龍太郎もこの宿にいた。東は大阪出身で大正6年(1917)に東大を卒業する。

5年(1916)4月東京美術学校洋画科に入学する。小笠原諸島に渡り2ヵ月を送り、北原白秋と知り合う。父島では当時島の小学校訓導だった横手中

学校先輩の円谷弘の紹介で、宿に泊ったのである。

9年(1920)はもう森川町の下宿に変っていたが、3月24日第29回西洋画科卒業生31名の1人として美術学校を卒業した。27歳である。昭和35～36年のことではあるが、自分も森川町の泰明館に下宿していたことがあるので、経歴のこのことが印象深く受け止められた。そしてこの年に由利郡大正寺村出身の横手女子小学校教員伊藤きせと結婚した。きせの弟伊藤利孝が先輩として彼を慕っており、姉を紹介したのであるという。10年7月長男夏樹が誕生する。住居は横手町の上野台で、女学校の講師を勤めていた。夏樹は成長して農業経済の分野の東京大学教授となる。

どうしても仏蘭西に留学したいと考え、乳呑児とその母を置いて(勿論大正時代の日本男児の留学は単身が普通だったであろう)11年5月仏蘭西留学を実行した。留学先では前衛画家の影響を受けたが、六郷出身の県人画家小西正太郎とも知り合った。12年1月には次女礼子が留守中誕生した。長女晶子は夭折したと年譜にあるから、事実上の長女という存在の人が、父の在仏中に生まれた訳である。

在仏中の『日記』には、日本は強国でもなく、美術も浮世絵以上でないというのが、仏蘭西や歐洲人一般の認識である旨を書く。翌13年(1924)1月1日の冬には、前年9月大震災戒厳令下で9月16日大杉栄が殺された件に関し、甘粕正彦憲兵大尉を批判し、仏蘭西人は主義者を殺すなどとは考えない。日本は野蛮国に映るらしいとも書く。

甘粕は明治24年生まれの出羽山形県出身、画伯より3歳年長の隣県人であるが、陸軍士官学校24期で同45年に歩兵少尉任官、大正7年憲兵に転じた。12年(1923)8月麴町憲兵分隊長になり、1ヵ月後に事件となったのであるが、実際に殺害に及んだのは麻布三聯隊の軍人だが、同聯隊には秩父宮が配属されていたので、甘粕らが代って責任を負ったともいわれる。兎に角歐洲の日本観と金沢自身の理念がわかって来る。

この年10月帰国する。在仏2年半弱で、戻って岡田三郎助主宰の春台会に作品を出す。翌14年6月次男正午が誕生する。上京したいのであるが、2月17日に父の死があったりして果たさず、郷土

史研究家大山順造と親交を深め、彼が横手郷土史編集会資料編集主任になったのを授ける形で編集に参加し（当時の用字では「編輯」であろうが、ここでは『図録』の用字に従った）、祖母の訓育で受けた素養を生かし「中山人形」が現在も名物として伝わる思潮を先導する役割を果たした。

いうまでもない本業にも怠るところはなく、二科展に14年に出品して初入選する。田中日佐夫館長の件の『図録』の跋「おわりに代えて」では「色彩面がもつ独自の質量感」を指摘し、仏蘭西で学んだところであろうとしている。

昭和2年(1927)遂に一家上京となる。東京府豊玉郡井荻町に居住する。翌3年には後に教授となる日本大学の講師に就任する。7年(1932)には秋の第13回帝展に「お茶時」を出品し初入選となる。田中館長に「地味だ」と評されているにしても、画壇での地歩も確かになる。モデルは知人の母と娘であった。

10年住所は杉並区井荻町となり、台湾に写生旅行をする。幼馴染の実業家平田末治が彼の地で活躍していて誘われ、半年にも亘って在台した。次の年林房雄「花嫁衣裳」、石坂洋次郎「伝説」(「時事新報」連載)の挿絵を描いた。翌12年43歳で杉並区善福寺に居を構えた。

昭和17年(1942)には、前16年冬に始まったいわゆる大東亜戦(太平洋戦)線の前線を描く従軍画家として、11月にニューギニア・ジャワに派遣された。終戦後の不自由な社会の中で、21年の日展に運びながら、リヤカーで運んだので締切に遅れたという「窓」を、54歳の22年10月第3回日展に出品した。初め注目を受けなかったが、米国人ドナルド・リッチに賞讃されたのが契機となって日本の新聞で紹介されて反響を呼ぶことになった。「カルチェの裏通りを散歩するとよく見る風景」の「晩食がすむとパイプをくわえて一ぷくやり窓の手すりにもたれてぼんやりと往來を見おろす」労働者が描かれており、「平凡な平和へのノスタルヂアが私にこの絵をかかせた」(『図録』)という文章を読むと、第二次大戦を経験した画伯の念いが伝わって来る。

26年戦後社会もそれなりの落ち着きを見せた頃日本大学の教壇に復帰した。27年には第8回日展

に力強い巴里風景の「肉屋の店」を出品特選となり朝倉賞を受けた。28年第39回光風会展では「裸婦と魚」なる直截的絵柄で会員に、第9回日展に無鑑査出品となる。29年第40回光風会展から審査員となり、第10回日展に依嘱出品する。30年の11回日展にも依嘱出品をし、31年の12回日展も依嘱出品で、画壇に重きをなすようになった。

昭和32年(1957)4月脳血栓で日本大学病院に入院したが、13回日展でも審査員であった。33年8月には日展入選のその「肉屋の店」を横手市に寄贈する。11月には、横手郷土史会の編纂事業や赤坂人形など郷土文化の振興に寄与した功績により、横手市文化功労賞を受けるといふ、愛郷心強い画伯にとってこの年は意義深い年であった。

34年、保存していた「横手郷土史」などの出版に関する深沢多市・細谷則理・大山順蔵ら名郷土史家達の肉筆原稿を編纂会に寄附した。この年心筋梗塞で倒れたが、35年2月には十柯会結成に主導的役割を果たし、6月には男鹿・十和田・十文字などの写生旅行をする。十文字は田植の盛りであった。制作・出品活動は活発に続けた。

39年(1964)70歳にして「十柯会も初期の新鮮さと前進的アイデアが薄くなり俗的になってさびしい」と書いた(『図録』年譜)というが、実際には、自分は41年東京高島屋の第7回の同会にも、「れんぎょうの花咲く頃」を出品する等活躍した。

彼の絵は10年毎に変容したといわれる。父をよく知る長男夏樹の評では、第1期は若描き時代、1940年代からの第2期は力強く重厚な時代、1953年頃からの第3期は明快なアウトラインを求めた時代、1961年からの第4期は抽象の時代と位置づけている(『図録』「造形に挑む」の項)。自らも60歳を超えて抽象画に入ったことを「外国では普通のことですよ」と語ったと記録されている(『図録』)から、明確な意志を持って前進したのである。

昭和42年(1967)8月9日心臓を病み、阿佐ヶ谷の病院で逝去する。行年74歳だった。墓所は故郷横手市蛇の崎町の観音寺にある。

矢田 津世子

明治40年(1907)6月19日南秋田郡五城目町字下夕町35に、鐵三郎・チエの末子ツセが誕生。姉

ツヤ、長兄稔、次兄不二郎、三兄三郎の兄姉で、三兄は早世し、姉は43年6月に秋田市の金融業武藤三治の長男重太郎に嫁いだし、長兄も秋田中学から小樽高等商業学校に進学したので、兄の秋田下宿がツセの四歳頃なので、それから一緒に住むことはなかったというから、次兄不二郎が最も近い存在であった。父は本来保戸野新町16番地の矢田多郎右衛門・リヨの次男であったので、彼女も秋田市民の血を享けていたが、五城目があくまでも「生まれ故郷」であった。

父は若い日「秋田日報」の社員であったので、明治16年4月から半年主筆を務めた木堂犬養毅に私淑したらしく、「木南」の俳号を持つ俳人でもあった。南秋田郡川尻村助役であったが、評価されてのことであろう明治31年五城目町助役に招かれたのである。新聞に連載の文学史関係記事では「月俸二十五円」だったとある。

軌道敷設運動などでも手腕があったという。潔癖性で子供の教育などは夫人任せであったが、南秋田郡上井河村の伊藤家の出である母は実家の教育重視の気風を享けていて、子供達を良く訓育し、近隣近在の娘達に行儀作法や裁縫を教える師匠の仕事もしていた。教育熱心の母の庭訓もあり子供は秀才才媛揃いであった。

大正3年(1914)五城目町尋常高等小学校に入学した彼女は全学期全甲の成績であった。翌4年父が助役を退き、秋田市亀ノ丁東土手町に転居したので、5月中通尋常高等小学校に転校した。父は翌5年8月一家で上京し、麴町区飯田町5ノ24に居住することにし、ツセは9月に富士見尋常小学校3年に転入し、初めは学業にも田舎出の差があったが、間もなく克服して才能を発揮した。

9年(1920)4月には麴町高等女学校に入学する。兄不二郎もこの年第一高等学校に進学した。上京で秋田中学から明治中学に転校していて、2度目の受験で合格した。その兄の影響もあり、読書好きでもう文学少女の趣があった。兄の導きも受け専心好学の日々であったらしい。

14年3月高等女学校を優等で卒業、4月から日本興業銀行に勤めた。7月父が逝去(「矢田津世子略年譜」『思い出の町』)して3人家族になった。昭和2年兄の名古屋転勤で母と共に3人で移住す

る。「兄妹の記」(昭和16年)では兄は技術者になっているが、実は保険会社の社員であり、不二郎は後に大和生命社長になる。女学校を卒え文学を志す妹に兄はチェホフ全集を読ませたが、彼女が最初に所属したのは、名古屋の「第一文学」であった。昭和3年7月復刊長谷川時雨主宰「女人藝術」にも参加する。

4年(1929)「女人藝術」名古屋支部員として活動するようになると、女流は勿論多くの文士・評論家・思想運動家と交わるようになる。時雨は本名ヤス明治12年東京日本橋生まれ、30年結婚釜石に移った。処女作「うづみ火」が「女学世界」に入選、作家になる。結婚生活には破れたが文筆力は戯曲の上にも冴えた。大正5年三上於菟吉と再婚し、「講談雑誌」「主婦之友」「婦女界」などに寄稿した。三上は明治24年埼玉県出身で時雨に熱愛を抱き支えた。大衆文学の売れっ子になると遊蕩に耽ったが、時雨は彼を理解し続けた。

時雨からは、林芙美子・円地文子・大田洋子らと共に矢田も恩恵を受けた。そして生田花代や林芙美子とも相い知った。生田は花世とも書く、明治21年徳島生まれで旧姓は西崎、大正3年に春月夫人となった詩人で、「女人藝術」創刊にも中心的役割を担って参加した。春月が昭和5年5月に投身したことはこの時代の著明事件であり、夫の歿後は「詩と人生」を主宰した。明治36年生れの林芙美子が山口県出身であることや、「放浪記」(昭和5)の作家であることは広く知られており、第二次大戦中は従軍作家も経験し、虚無的とも達観しているとも受取れる「めし」(朝日新聞)連載中急死した。

6年(1931)正月津世子は一人で帰京、目白で創作生活を始めた。大谷藤子や大岡昇平らと相い知ることになる。大谷は明治34年埼玉県秩父郡の生まれで、本名大谷(おおや)トウ、東京の三田高女を卒業し東洋大学聴講生にもなり、23歳で井上海軍士官と結婚したが数年で離婚、4年には「文藝尖端」の同人となっていた。矢田とは毎日会うような真の親交を結んだという。大谷は昭和8年(1933)には高見順や円地らの「日歴」同人になる。

大岡は明治42年東京生まれ京大出身のスタンダード研究家であった。後年出征して体験による『俘虜』を出し、『武蔵野夫人』『野火』などで広

く知られるようになる。高見は明治40年福井の生まれ本名高間芳雄で「故旧忘れ得べき」で第一回芥川賞候補になる。

矢田は軽部清子、湯浅芳子をも知り、特に湯浅の影響を受けた。湯浅は明治29年京都生まれ本名ヨシで、日本女子大、津田英学塾に入るが何れも中退、ロシア文学に志す。大正11年早大露文科聴講生にもなるが、2年で中退し13年中條ユリ（宮本百合子）と共同生活に入り、昭和2年から5年まで2人でモスクワに留学した。帰国後全日本無産者芸術団体協議会に属し活動した。

昭和7年(1932)夏に、矢田は後に話題になる坂口安吾を知った。坂口は明治30年新潟県の生まれで、本名は炳五で東洋大学印度哲学科を出た。やがて彼女と恋愛関係にもなったというが、11年6月には「実物の彼に会ふと何らの感興もわかず、何らの愛情もそゝられぬ」とメモして交りを絶つに至る。兄の本社転勤で一人暮らしは終わり、一家は淀橋区下落合4に落着くことになる。

彼女は一年間の空白だけでまた兄と同居できることとなった。8年5月安吾や田村泰次郎らの同人誌「桜」に参加する。非合法活動に入っていた湯浅の求めで18円のカンパをしたことから、7月22日戸塚署に検挙されるという、時世的不運に見舞われた。

これについて、「三月にわたる拘留の中で肺結核の症状が出るようになった」（「美貌と誠実の閨秀作家矢田津世子」『秋田人物風土記（続）p.239』という叙述と、「検挙され、十日間ほど戸塚署に留置された」（矢田津世子作品集『茶粥の記』解説）と期間について出入のある叙述が、同一文学者によって書かれているので、館話で配布の「年譜事項」では留置が二度あったのかと疑問視していた。

従来は「十年、左翼のシンパの関係として戸塚署に検挙され二十八日間留置」（『秋田県史』文芸・教学編・昭和36）という説（佐藤鉄章筆）も行われていた。事実はそうではないようである。『秋田市史』にも「戸塚署に検挙留置（約一〇日間）され、心身を消耗する」（通史第五巻・平成17）とある。自宅で大谷も一緒にいる処で検挙されたという。

昭和9年11月阿仁に伯母の見舞に赴き「鷹ノ巣駅」を翌年『旅』（2月号）に発表するが、五城

目に帰る折はなかった。

昭和10年(1935)6月大谷の推薦で、大谷・高見・円地らが創刊した「日曆」の同人になった。武田麟太郎の指導を受ける。武田は明治37年大阪出身、新感覚派の文士であったが全日本無産者芸術聯盟に属し、プロレタリア文学の新人として頭角をあらわし、昭和4年「暴力」が出世作となった。11年「人民文庫」創設、散文精神によるファシズムへの抵抗を主張した。彼女は良い創作上の師を得たのである。

11年には「日曆」改名「人文文庫」3月号に「神楽坂」を発表。9月これが第三回芥川賞候補になった。実際に受章したのは九州出身で北海道の酪農を体験した鶴田知也の「コシヤマイン」であった。鶴田は第二次大戦末に横手に疎開して来る。初創作集『神楽坂』（改造社）が出版されるのは11年12月であった。12年1月創刊の「新女苑」に専属的寄稿者となった。前年の芥川賞候補のことは勿論、「蔓草」「やどかり」「秋扇」「女心拾遺」などを発表し、作品が評価されたからであろう。「秋扇」は昭和13年に松竹で映画化され〈母と子〉になる。11年は二・二六事件という軍国化の印象的な事件のあった年である。3年前に左翼的だと誤解されて官憲の禍を受けた作家の、創作心は昂まったことであろう。

結局12年(1937)8月には親友大谷藤子と1ヵ月の満州旅行に出る。7月7日芦溝橋事件があって当時の所謂日支事変勃発直後の旅である。しかも6月30日には満州自体でも、黒竜江の乾岔子島にソ聯艦艇3隻が進入し日・満軍と交戦したという日・満・ソの国境でも不穏があったような状況下であった。五族協和の王道楽土の掛け声のようなことではない土地への女旅である。

短篇の「吉林」「佳木斯」「露西亜人墓地」「ルスキイ・ドム」などの作品を諸雑誌に書いているが、「吉林」では「内地に居る心地が頻りであった」「内地の匂いが漂っているようであった」と書くが、「美人の産地だと聞いていた…柳姿端麗な美人にはとうとう逢わなかった」という。自らの美人の誇りに照らし然るべき女人に会わなかったのかも知れない。「佳木斯」では松下江を下って佳木斯碼頭に着いたのに、約束の碼頭長（水駅長）

の出迎えがなく、遅れてやっと来た彼の車は「何度も跳ね上り、天井に頭をぶっつけた。運転手はハンドルにしがみついている」という「泥道は何処までもつづき」辿り着いた町は「すれちがった自動車の中に、美々しく装うた舞妓の男の膝に抱かれている」という町の中心に入った。「利権目あての企業家も大分入りこんでいる」と批判的に書く。

「露西亜人墓地」は「何かのお祭り日にあたっていて、墓地の入り口には満人の花売りが所せまいまでに荷をおろし」と、哈爾賓のロシア人の参詣人を迎える「もの寂かな墓地径」を描き、そこを「往き来する」人たちの「明るく澄んだ愉しさ」を感得しながら、「国をもたないこの白系の露西亜人」に「私は一種の哀感を覚える」と心情を述べる。平成になって間もない頃私が哈爾賓で見たのはソ聯国民のロシア人で、哀感を覚えるような情景は無かった。

「ルスキイ・ドム」とは此の時代の白系露人の孤児の学校のことであるが、「此処で過した半日は愉しくまた明るく、思い出すだけでも心豊かになる」と書き、「まるで父親のように生徒から慕われていた」教父の「他の寺院へ移る」「荘厳な礼拝式が行われていた」ことの叙述をして、学校に別れを告げる時に「突然、列の中から真っ黒く陽やけのした少年がニコニコして声をかけた。……私と眼が合うと、『さよなら、さよなら』と叫び立てた」日本人のように髪の毛の黒い、唯一人日本語を話せる「朝鮮の子」が育まれていることに、感謝の念の生じたことを記している。

満州旅行は矢田にとって多分唯一の外国(外地)旅行であったろうから、多くの刺戟を受けたと考えられるが、この12年の「婦人公論」9月号に発表したのは「思い出の町五城目」で、故郷のことであった。勿論執筆したのは渡満前のことであるから、そこに満州旅行の影響はないであろう。

最も親身の矢田津世子研究者である作家小野一二氏は「この随想は『婦人公論』が昭和十二年に……当時の代表的女性作家たちに毎号書かせていたシリーズの中のひとつの作品である。」「津世子は、即座に『五城目町』を選んだのであろう。題のストレートであることが、思い入れの深さを想

像させる。五城目町には、小学校二年、八歳までしかいなかったのだが、五城目町で生まれ育ったその時期が、自由で活発で最も幸福な時期だったのである」と解説する。

更に続けて「季節のうつろい、町のたたずまい、遊び場、幌馬車と自動車すべてあざやかである」と評価し、「そして『懐しい五城目の地を踏まぬこと、もう、二十年あまりになる』という最後の文章を深い意味付けて記す」(『矢田津世子随想集 思い出の町』・五城目町教育委員会・2004年の解説)のである。この女流作家が如何に郷土で顕彰せらるべき先人に相応しいかが理解される。

13年(1938)5月には病床に就く程体調が悪くなったが、7月には先に触れた映画「母と子」が封切られた。そして14年には「新女苑」に通年の長編である「家庭教師」の連載が行われた。また8月15日から翌年1月9日まで、「巢燕」を120回に亘り「北海タイムス」夕刊に連載する。執筆は軌道に乗っていた。15年(1940)には1月に『家庭教師』を實業之日本社から刊行され、6月『巢燕』を白水社から刊行し、7月には『家庭教師』が松竹映画となるなど文運は旺んであった。

昭和16年にも1月『女心拾遺』が筑摩書房から刊行、「改造」2月号には「茶粥の記」が発表され、8月實業之日本社から刊行される。この代表作の話の筋は、師範出の一日市小学校訓導から、文検を目指し上京したが、結局市役所に勤め戸籍係であった人物が41歳で死去、忌明になり未亡人清子が、姑と共に郷里の五城目に遺骨を持って引揚げる途中に、信州の山あい霊泉寺温泉に宿るところまでの話であるが、心の行き着くべきは五城目である。作者の故郷思慕は歴然である。

5月には「兄妹の記」(「新女苑」)が発表される。純情さも感じられる好作品に麗しい兄妹愛が滲む。「文芸」10月号には鶴の恩返と同工異曲とも言える説話が導入部の「鴻ノ巣女房」が発表され、翌17年8月には豊国社から刊行される。主人公の「ぎん」なる女性は、八郎潟に近い町の小学校長宅の子守りになったところから社会に出る筋だが、校長の「赤髭コ」のニックネームは、父親鐵三郎と親しい五城目小学校の實在の校長のあだ名だった。また「タロンペ」などという垂氷から

出た方言も文中に趣深く用いられている。

このような状況下「書きたい」という意慾も、「読みたい」という希望も強かったに違いないのに、病状は悪化して、17年秋ごろから病床に就くことになるが、18年夏頃から胸の病は深刻化し、昭和19年(1944) 3月14日数え年38歳で逝去した。東京都東本願寺田無墓地に眠る。10月19日に母チエも亡くなった。しかし彼女の心の支えとして生活も導いた兄の、元大和生命社長不二郎は昭和56年(1981) 1月に世を去ることになる。

この女流作家について初めて文章を書いたのは昭和59年の冬から春にかけての頃で、『秋田美人の謎』(白水社)の原稿、原題〈秋田美人の文化的考察〉を執筆した際である。この著述は末尾の十章が「近現代の秋田美人」となっていて、40人以上の秋田出身女性をそれぞれの意味で挙げているのであるが、出生年次とか活躍分野とかの一切の区切りに無関係でこの章の冒頭に扱ったのはこの人であった。項題もズバリ「美人作家津世子」とした。写真は初代出版部長として親しく附合って頂いていた佐藤暢男現社長に頼み、秋田魁新報社の報道資料を借りた。写真を見た瞬間「最高!」と感じたからである。いうまでもなく「美」は個人的感覚判断であるから異論はあろうが、その時はそこまで考え及ぼさなかった。

そこでは扱った資料にそうあったので「拘留されること三ヵ月に及んだ」と書いているが、「作風には、郷里秋田の風土性というものが影響したことは明らかであろう。作品の中に、よく秋田と関係する人物や事物が登場することからも、それは知ることができる」と正しい評価をし、「当時『文壇一の美人』といわれたことも、秋田出身なればこそその素質によるものである」と、『秋田美人は素質美人』とする自説を主張することも忘れなかった。この本の刊行後5ヵ月昭和59年(1984)12月13日、五城目町で作品にも出て来る酒屋の堀の前に「矢田津世子文学碑」が建てられた。

同町では翌60年4月「矢田津世子文学展」が催され、さらに故郷の顕彰運動は平成7年(1995)4月2日「矢田津世子文学記念室」の五城館内開設となったし、同室の編集で『矢田津世子作品集』がシリーズで同町教育委員会から発行され、2004

年3月には『矢田津世子随筆集』も同様にして刊行されている。

小牧 近江

明治27年(1894) 5月11日南秋田郡土崎港町永覚町で、近江谷栄次・サノの次男として誕生した。長男は早世していたので実質は長男であった。あまり見ることのない「駒」という文字で名づけられた。訓みは「こまき」で字義は馬の牧場である。生家「近栄(きんえい)」は土崎港の築港の件にも積極的で私財を提供しており、金融業も営む雑貨を扱う豪商であった。

父栄次は南秋田郡の一日市で郵便局を営んでいた畠山源之丞の七男であった(『種蒔く人小牧近江の青春』では三之丞の五男とある)。明治7年1月生まれの彼は21年5月親に内証で秋田中学に入学した。勿論許されていないので連れ戻されることになるが、「夏休まで」と期限つきで在学を続け猛勉強をして冬休まで在学できた。16歳で近栄の養子になり、8年11月生まれの養家の娘サノと明治23年12月に結婚した。6男3女を儲ける。

明治28年の財産申告では、北方日本において現金所持番付トップの28万円であったと『ある現代史』(小牧の「自叙伝」)に記されている程の近栄も明治31年土崎大火の被害で大打撃を蒙った。33年(1900)4月駒は土崎尋常高等小学校に入学し、同じ乙組の中で今野賢蔵・金子吉太郎らと級友として学んだ。

父栄次は30年頃に郡会議員になっていたが、36年には県議員になり、37年(1904)の第9回総選挙では、被選挙権を得る満30歳を過ぎること1ヵ月の記録的若さで衆議院議員に当選した。ナポレオン崇拜者の栄次は、親類縁者の子女11人を東京の暁星小・中学校に進学させている。同校は仏蘭西の修道会マリア会が設立している仏蘭西語教育の確かな学校であった。駒も小学校を卒業するや39年4月に上京暁星中学校に進学している。

明治42年(1909)10月26日ハルピンで起こった伊藤博文暗殺事件で、ロシア官憲に捕えられた安重根にも同情的で、獄中便を受け取っていたような栄次は、43年7月ベルギーのブリュッセルで開かれる第16回列国議会同盟会議に尾崎行雄などと

日本代表で出席することになり、17歳の駒を、フランスに留学させるために、途中「海だ」という息子に、「バイカル湖だ」と教えたりしながら、シベリア鉄道経由で伴った。同道した長岡半太郎理学博士からは、留学させるなら仏蘭西より独乙が良いと進められたが、父の想いは動かされることはなかった。この留学については、日頃物静かな母親サノが積極的に留学計画を支持したという。父は、自分は「政治家」だが、これからの人である息子は「外交官」だという理念で、仏蘭西留学を実現したのだという。

留学したパリのアンリ四世校では小学部8・9歳学級に所属させられた。駒の語学力を考慮してのことである。新来の年が離れ背の高い東洋人を見て、幼い級友たちは「シナ（中国）人だ」とささやいた。そこで彼は「ではない。日本人だ」と宣言したという。ピエールという少年が関心をいだき親しさを示し、彼の家のサンプリ家にも招かれる。10歳のピエールには15歳の兄ジャンもいて年の近い者同士の交りもできた。サンプリ家は南仏ドローーム県に城を持つような家柄で、父はセーヌ州裁判所の次席、母方の祖父は元大統領エミール・ルーベであった。典雅なピエールの母から多くの訓育を受け得た。

明治44年(1911)には飛級し、新しい級では独乙人留学生のエルンストと親しみ、その紹介でフランクと友人になった。フランクの亡父は時計商であったが、その家を訪れて母親の料理を味わい妹アンナに恋心を持つまでになる。故郷では意欲的な父栄次が、明治45年5月第11回総選挙にも出馬し、当選した三浦盛徳に7票差で、落選した。

近栄の家計は逼迫し仏蘭西への学資の送金も止まり、駒は学費不払いにより放校処分となった。彼は親しいサン・プリ家にも何も語らず学寮を去り、アルコールランプと小鍋だけを持つマンサルド（屋根裏部屋）生活者となる。織物問屋の配達係の仕事に就き、夜間労働学校に通い、貸本屋活用の勉強を展開していた。

この45年5月8日付で仏国駐劄大使となった石井菊次郎は外務省時代近江谷栄次代議士と交わりがあった。大正2年(1913)4月日本大使館から至急出頭を求める書面が届いた。大使は近江谷駒

青年が安定した生活をするために大使館に勤めることを提案したのである。彼は飲んで受けた。

雇員として勤務し、電話交換のようなことまで含む仕事に、巴里生活の経験を生かして取り組んだ。館内実務を果たすほかに、大使の巴里の巷に関わること例えば図書購入の案内や助力までした。

故郷では大正3年6月父が土崎港町の町長に就任した4年4月まで在任したという（『黎明の群像』年表）。そしてこの年7月第一次世界大戦が勃発した。8月に独乙の宣戦布告があって、9月2日仏国政府はポルドーに遷都し、日本大使館も従って移ることになった。

同じ暁星中学に学び乍ら、夜間部で先生が方言を話していたため、巴里に留学しても彼のように仏語が通じなくて悩んでいた藤田嗣治は、大使館武官に抗してまで巴里に止まろうとしたが、駒も10月には大使の意向もあって巴里大学法学部に入っていたので、心中は同じであったと思われる。

バカロレア外人枠3人の受験で2人合格の中に入った彼に、その官界入りを期待する大使は当然公法分野の専攻を望んでいたに違いないが、彼は私法専攻を選んだ。将来の小牧近江がここで明らかな方向を踏み出したことになるといっている。

大戦では親友のフランクが戦死し、フランクの妹アンナは母の意向で従兄と結婚したし、彼自身も戦禍を体験してロマン・ロランに共鳴し平和と平等を希求していた。ロランの影響もあってサンプリ家の兄のジャンはソルボンヌで哲学科を卒え反戦運動に与して、一層彼の反戦運動への傾斜は強まって行った。心配したのか石井大使は帰国も進めたが従わなかった。

松井慶四郎大使が赴任すると、大使館の役人と合わない面も顕著になり、10月暁星の先輩である画家小柴錦侍のアパートに身を寄せ大使館を出る。6年11月ロシア革命があると、それも彼の思想や行動に刺戟を与えることになる。

大正7年(1918)6月ソルボンヌを卒業したが、ジャンのすすめで「クラレテ」の作者アンリ・バルビュスに会い、その運動に参加するようになった。11月11日には休戦になる。年末には大使館からパリ講和会議への協力を求められる。

大正8年1月講和会議日本全権団事務嘱託とな

った。2月には此の年流行のインフルエンザに罹った。この流感でジャンは死亡したが、彼は任務を達成できた。尚日本の全権団は西園寺公望大使以下、吉田茂・重光葵・近衛文磨・松岡洋右などで構成されていた。故国ではこの年父栄次は弟晋作の第三高等学校入学を機に京都に移住した。即ち弟は第二次大戦後の社会党代議士島田晋作である。この事務嘱託の報酬で旅費を稼ぎ得た。

バルビユスの言う平和運動を日本でやるという発想もあったようで、帰国の途に就いた。12月24日神戸港に上陸し、約10年振りで日本に戻った。大正9年(1920)1月満たされない何かがあったらしく、宮崎の「新しき村」に武者小路実篤を訪問しているが、3月には外務省欧米局情報部の嘱託となった。2カ月後の5月父栄次は担ぎ出されて第14回総選挙に出馬した。小選挙区のもと河辺・由利の第5区に立候補したものの、斎藤宇一郎に敗れて、政治から離れた。この頃父は、秋田に帰っていた金子洋文(吉太郎)と記念館で出会い、「仏蘭西から帰って来たが、赤くなって帰って来たので困った」と言ったという。それを聞いて金子はすぐ近江谷に電話をしたという(『黎明の群像』)。

幼き日からの親友2人は7月に10年振りで会い、「種蒔く人」を発行することにし、洋文の提案で表紙にミレーの「種蒔く人」を図案化した。手本は、小牧が28冊持ち帰った、ロマン・ロランや友人ジャンが寄稿していたスイスの雑誌、「ドマン」であった。

大正10年(1921)2月25日、土崎版「種蒔く人」が創刊された。この年はパリ講和会議の功績で勲六等瑞宝章を受けた年でもある。形式上発行所は東京青山の小牧方「種蒔き社」であるが、実質上土崎港町「寺林印刷所」印刷18頁、定価20銭。200部発行の費用23円は彼の月給150円から出された。同人は小牧を筆頭に洋文・賢三、伯父の近江谷友治・同年生まれの従兄弟の一日市島山松治郎、島山の親友五城目町安田養蔵、洋文の友人東京山川亮(福井出身)の7人であった。続いて3月・4月と、3号まで発行したところで休刊になる。新聞紙法による、政治問題に関わる記載の定期刊行物発行保証金500円が無かったのだといわれる。

しかし「偽りと欺瞞に充ちた現代の生活に我慢

しきれなくなって」「何うにかしなければ」という燃える心の出版は、この休刊後に仏蘭西の詩人ポオル・クローデルの来日なども刺戟となって、秋田魁新報8月21日紙に「もっと大きなことを考えたのだ」(「種蒔く人」の再現)と宣言していた小牧は、10月3日東京版「種蒔く人」56頁・30銭を発行した。表紙にミレーの絵は無かったが、3000部は直ぐに売り切れた。発禁になって名声を得たからである。同人は土崎人の小牧・洋文・賢三の3人の他、佐々木孝丸、青野季吉らの数人が加わった。11年6月の「二巻九号」から今野が編輯発行名義人になる。

11年11月前田フクと結婚し、翌12年8月に長女清井が生まれる。「種蒔く人」は20回発行された。尚長男左馬之助は14年(1925)6月の生まれで、長じて九州大学教授になる。長女誕生の翌月あの関東大震災が襲った。ここでも印刷所が焼けるや洋文と賢三が土崎に戻り今野執筆の「帝都震災号外」4頁を発行した。しかし年末再刊計画に関する同人話し合いでは、「自由主義から出発しなければ」という意見が出て、後戻りすることなどできないと、小牧は声を挙げて泣いて、洋文と運動の遂行を誓った。

13年1月に別冊「種蒔き雑記」が刊行され亀戸事件の有名な記事を洋文が執筆した。結局これが22冊目で終刊号になり、6月創刊の「文藝戦線」へと運動は続く。14年9月鎌倉へ居住することになる。昭和2年(1927)6月労農芸術家連盟に参加し、3年5月には「国民新聞」の記者となっていたが、4年9月には在日土古(トルコ)大使館に勤務し、それは10年も続くことになる。しかし昭和6年(1931)には満州事変が勃発し、12年には日中事変が勃発し、国際関係が複雑になって来た。特高警察の尾行もあり、13年12月土古大使館を辞職したのである。

昭和14年(1939)8月パリ講和会議の関係者などの支援もあって旅券も入手でき仏領印度支那に渡り、「印度支那産業」に勤務した。9月第二次世界大戦が勃発事態は更に深刻化して来た。15年夏休に長女清井は弟左馬之助とハノイに父に会いに行った。雙葉高等女学校の生徒だった。そして16年(1941)3月に卒業した清井は父の身の世

話をする為に改めてハノイに行く。台湾までは父が迎えに来たので一緒に行ったが、日本軍の南部仏印進駐の動きがあり、彼女1人が飛行機でハノイに向い父は台湾に残った。

2ヵ月も一人暮らしをし、8月13日には、17年12月に結婚することになる、海軍短期現役主計科士官で一高東大出身の内務官僚桐山隆彦と出会った。16年12月8日「大東亜戦争」が勃発する。約半年後17年は6月8日に清井の祖父栄次が渋谷区代々木上原の自宅で逝去した。67歳で墓は土崎善導寺にある。

昭和19年対米戦闘の局面は暗くなるばかりの状況下で、小牧は「ハノイ日本文化会館事務局長」に就任した。彼のフランスについての総合力が、日本にとっても現地に於いても貴重な意味を持っていたことが理解される。ベトナムは漢字で書けば「越南」で古代から有力な地であった。

中国大陸の春秋時代に「呉・越」と併称された越の南の然るべき国土と民族という認識の呼称だったものと解される。越王勾踐は呉王夫差との浙江の会稽山の戦いで敗れ捕われ、多年臥薪嘗胆の辛苦を味わったが、後年富豪陶朱になる楚人范蠡の補佐で、紀元前473年夫差を破る策略に成功し覇を唱えた。やがて楚の威王に滅ぼされるが、越の地名は残った。ベトナムは19世紀初め越南を国号とした状態で、1884年仏蘭西の保護国にされていた。仏蘭西熟知の反戦平和主義の局長は、日本の敗戦後も現地の人々から評価を受け期待されたのであろう。

昭和15年(1940)9月に仏領インドシナ聯邦北部に日本軍が進駐し、16年7月に仏印南部に進駐した段階から、日本軍の力を背景に「越南独立」を目指すベトナム民族に、行動を以て推進を働きかけた小牧近江と兵庫出身の小松清の2人の日本人が、現地で強烈に意識され期待されたのである。

20年3月9日に日本軍は仏印統治の仏蘭西当局に「三・九事変」と呼ばれているクーデターを起こしていたため、仏蘭西当局に対してベトナムが自主的に独立を克ち取るという状況を迎えることがないままで、8月15日になってしまい小牧自身は「モスクワからの朝のニュース」で日本の敗戦を知り、「五十歳でしたが、一夜にして白髪にな

る」(『ある現代史』) 体験をして終戦を迎えたという。ハイフォン近くの中国軍管理下収容所に日本人は送られ、軍隊は中国軍に武装解除された。

21年(1946)1月日本商社の財産接収が開始された段階で小牧は商社代表と共に、中国軍用トラックで脱出に成功した。ハノイではフランソワ・ミソフ海軍大尉という30歳程の若いフランス軍将校が「パール・オオミヤ」と呼びかけて、フランスとインドシナの間の「和平協定」の締結実現に、安南人と知り合いの多い立場での協力を要請した。

受諾した小牧の努力もあり3月6日「ハノイ協定」といわれる「仏越和平予備協定」が出来て、目的達成に近づいた如くであったが、5月に彼は日本に引き揚げとなり、その後12月には仏軍の軍事行動で第一次インドシナ戦争の火が燃え上がり、終にはあのベトナム戦争に連なることになり、努力はこの段階では実を結ばなかった。

昭和24年(1949)4月中央労働学園大学教授となり、26年8月には法政大学教授に就任し、高等教育に携った。法政大学教授は昭和40年(1965)3月の退職時まで続けられたので、教育者としての一面も確かにあるが、没年になる昭和53年(1978)に分銅惇作氏が、小牧と洋文との対談のテレビ番組の司会をし、終って色紙に揮毫を求めたら、洋文は「飢えと戦争を防げない文化は真の文化ではない」、小牧は「すべての道はインターへ」と染筆したという。洋文は文学者、小牧は単に教育者などではなく国際行動家であることを示している。

多くの著述もある小牧近江について、自分流の定義をすれば「本質的に外交者」だということになる。日本と土耳其の大使館に勤務したのだから、外交官にしたいという父の庭訓によって渡仏留学したのではあるが、通常の「外交官」とは異なるように見えるので敢えて「外交者」と表現した。また昭和32年(1957)3月、日本ペンクラブ代表として松岡洋子とロンドンの大会に出席した。これは言論・著述者としての本領を示す事実である。

長女清井は「母は経済的にも大変だったと思うけど、泣き言も言わずにいつも矢面に立って、明るく父をかばっていた。父と母は仲が良く、子供心に楽しいわが家と思っていた」(『黎明の群像』)と述べていたが、そのフク夫人が昭和47年(1972)

8月逝去した。そして53年10月29日に鎌倉の聖七里ヶ浜病院で、脳血栓の呼吸不全のため種蒔く人のリーダー小牧近江は、85歳で世を去った。

澤木 四方吉

明治19年(1886)12月16日南秋田郡船川村澤木晨吉・タキの五男が生まれた。四方吉である。「しおきち」と読んだ本(『美術の都』岩波・昭和39)もあるが「よもきち」である(渡部誠一郎『沢木四方吉』秋田魁新報社・昭和60)。母タキは文久2年(1862)に弘戸村長根小野家生まれの麗人でその素質が彼にも引き継がれたという。

澤木家は300年前に舟川村に移り住み代々肝煎を務めた。幕末の頃舟川は60~85戸ほどの集落だったという。晨吉の祖父彦右衛門は、高孫の詩人沢木隆子が「舟川の小原庄助だった」と評す身上潰しでもあった。隆子の曾祖父駒吉は天保5年(1834)船越村船木家の長四郎・ナカの次男に生まれ、15歳の嘉永元年(1848)彦右衛門の養子になった。12歳で著明な学者で『絹飾』の編著者鈴木重孝に書算を学びよく出来る少年なので師の執り成しで澤木の養子に入る。天保7年脇本村天野家に生まれたタケが、嘉永5年(1852)17歳で嫁いで来た。

彦右衛門はこの若い養嗣夫婦に家政を任せてしまう。2人は財政建直しに必死に取り組み、財政難を案じ父の仮病を申遣り取り戻そうという動きを見せた実家に、「嫁したら戻るな」という教えに矛盾すると拒否した若妻も美事であった。先ず家屋を売却して舟による商業で負債を処理した。倒産建て直しから6年安政5年(1858)秋に長男晨吉誕生、6年には25歳で肝煎に就任したのである。

この父晨吉は、地元の桑名堅連という医師の寺子屋で四書などの漢籍だけでなく英語も習った。明治13年には呉服物の仕入れに初上京するなど、商売に積極的で且つ福沢諭吉の崇拜者であった。明治23年(1890)船川村長になる。子供は長女トク、長男早世で次男再吉、三男淳吉、四男堅吉、五男が彼四方吉で、六男彦吉は早世した。

明治25年(1892)4月四方吉は船川尋常高等小学校尋常科に入学する。村は27年船川港(こう)町となる。29年3月尋常科を終えた四方吉は高等

科に進む。数学の成績は抜群であった。30年1月9日父は資本金3万円の澤木銀行を設立し、町長を辞任した。明治14年1月生まれの再吉が慶応普通部卒業安田銀行秋田支店で修行し、この銀行の実務に就いた。行員は他に少年1名であった。

32年3月高等科卒で四方吉は4月明治学院に入学、33年1月慶応普通部1学年に補欠転入した。37年4月普通部首席卒業で慶応義塾大学予科に入学、普通部卒で帰郷の再吉以外の兄達は淳吉も堅吉も理財科だったが、彼は文学科を目指すことになる。普通部時代は理財科2年の淳吉、予科2年の堅吉と「あさ」という女中と一軒家を借りて暮らし、乱雑粗野の学生達が3人の住家を「別世界」と呼んだ。

その優雅な生活中的の34年(1901)5月に美しい母タキ39歳が世を去った。7月父は二田ミナと再婚したが、継母も36年2月病没し、父は5月に三浦エイと三婚する。「父の顔を見ると腹が立つ」と姉トクに言ったというが、繊細な彼の生母を愛する気持ちがよく解かる。39年(1906)4月慶応義塾大学本科学科に進学した。同専攻生は小幡直吉・片野文一・山崎恒吉の4人であったが、小幡・片野は在学中死去、山崎は理財科に転科した。41年3年生で「三田評論」に、評論「自然主義論」(筆名は〈潮鳴〉)や母の死を悲しみ思慕する小説「行く雲」(筆名は〈うしお生〉)を発表し、文名が揚った。後に同志社から転学の林中五郎と2人で明治42年3月卒業した。小幡は親友だったが23歳で結核で死去したのである。42年大学を卒業し、9月母校普通部教員となり英語を担当した。

明治42年(1909)12月1日発行『知られたる秋田』(瀧澤武)で、谷河梅人(日本新聞記者)の「秋田めぐり」に「記者の宿泊したるは澤木氏の宅である。澤木家は船川の豪族と徳望一郷に高く、家を興した駒吉翁は、七十二歳の高齢を以て鏗鏘として尚森林事業に従事して居る。当主晨吉氏は合名会社澤木銀行の頭取である一家を挙げて福澤翁の高徳を慕ひ一門悉く慶應義塾出身である。殊に三男四方吉氏は昨年を以て文科を出でたる人で、記者は特に懇切な歓待を受け、且つ種々視察の便を與へられたのは深く謝する所である。左のサノサ節は氏の戯作である。『秋田市を、秋田一

寸出て見りや浦塩斯徳、向ふに見ゆるは浦塩斯徳、西比利亜鉄道に一寸と乗りて倫敦巴里の花を見るサノサ』と記される。

中央のジャーナリストの見た澤木家と四方吉の実相と、サノサ節作詞に示される日本海対岸への念いは、同じ船川の4歳違いの中川重春の視点と通じており、男鹿半島の風土性を感じる。翌年にかけて文筆活動は一層展開、43年5月永井荷風教授の主宰する「三田文学」が生まれ寄稿する。

43年晩秋に理財科2年の学生水上滝太郎を訪ねて小幡直吉の遺稿詩集刊行をし、友人になった。更に小泉信三・岡田四郎・松本泰を加えた5人で「例の会」を結成、三田四国町の甲辰館なる澤木の下宿で論談を重ねた。また44年には「三田文学」に「夏より秋へ」（筆名は〈若樹末郎〉）という初恋を扱った恋愛小説を発表した。

この小説に関して荷風は、風景描写については褒めたが、人間描写については駄目を出したという。しかし生粋の慶應義塾出身者としてこれは最初の「三田文学」への小説掲載だった由で、「例の会」メンバーは小泉を除き皆創作熱に取り付かれ、水上のように作家になった者も現われた。一方澤木は自分の理論を小説に具現できないことを悟ったらしく、以後創作の筆を折った。尚、評論・随筆等の筆名は〈澤木梢〉を用いている。この44年の7月には祖父駒吉78歳（満76）で逝去した。生涯170町歩に85万本の杉を植立てていた。

明治45年(1912)7月慶應義塾海外留学生として、美学・ドイツ語研究に渡欧するが、航海途中で年号が大正に変わる7月30日はコロンボに寄港していた。8月マルセイユ上陸、リヨン滞在3日程（『美術の都』）でパリ経由ベルリンに至り、10月ベルリン大学入学。『イタリアルネサンスの文化』『ルネサンスの建築』などの著者ヤコブ・ブルクハルトの著述に惹かれ、美術史研究を志向するが、下宿で咯血するという残念なことになる。

大正2年(1913)3月移ってミュンヘン大学に入る。西洋美術史専攻だが近代美術への興味は薄れ古典芸術に惹かれる。8月パリで2ヵ月暮らし、島崎藤村と同じ下宿で又咯血する。3年7月28日世界大戦勃発、彼と小林澄兄に在ベルリンの小泉信三から電報あり予定のイタリア見学不能にな

る。ベルリン、オランダ経由ロンドンへ、小泉・小林・彼と三辺金蔵の4慶応人である。下宿は田舎の開業医の娘姉妹の経営。兄弟である海軍少尉の戦死直後で、英国一般の質素で平板な食事に不満。米国から水上滝太郎も来英し、澤木の独乙的变化に驚く。彼は質素儉約を旨とし統一の力で世界に冠たらんとするドイツの旺盛な意気に強く影響を受けていた。開戦で見合わせているイタリア旅行も実行しようと思い直し、4年2月24日秋田魁新報の「開戦前後の経験(7)」にも国民的自覚や軍備・外交の必要性を論じ「強い自信をつくること」の必要性を〈澤木梢〉の筆名で論じている。

この大正4年春に3度目の咯血、求めて日本人医師で九州の大学から留学の小野寺氏の診療と指示で次第に恢復した。彼は英国の国力や衛生的な独乙の潔癖さを評価しつつも、寒くて食物も不味い不親切な感じの英国とプロシヤ的な勘定高ベルリン人は好きではなく、「万一死ぬ運命ならば、パリかフロレンスで死にたい」という程であった。8月には念願のイタリア美術史旅行に赴くことになる。パリで島崎藤村に会いリヨン経由であった。

フィレンツェから10月7日ローマに着く。大使館でロンドンや船川からの便を受け取る。在伊の大島勇爵が邦人を料亭に招いた小宴で、14日京都帝大の考古学者濱田耕作（青陵）と知り合い、1週間目位に烈しい腹痛と下痢で1日臥床した際も、浜田に誘われて見学に同行するなど、11月中旬まで滞在し精力的に見学した。滞在期間の終り近くには小泉信三もローマに来て邂逅した。

12月またパリに戻り小泉・水上と3人ソルボンヌで下宿生活、そこに濱田も姿を見せ、仏・伊での研究を終えて、大正5年(1916)1月24日ロンドン出帆伏見丸で澤木は帰国の途に就いた。英・独・仏・伊の外語に通じた彼は、3年4ヵ月の欧州留学で大きな収穫を挙げて、濱田や日本赤十字社の救護班26人などと共に3月20日過ぎに神戸港に上陸した。秋田赤十字病院の資料では3月21日で、濱田の記述では22日であるが、澤木は31歳で濱田は36歳で、2ヵ月の船旅で濱田と澤木は数年来の友人関係の如くになった。京都住いの父も迎えた。

赤十字の26人は大戦で同盟国英国のハンツ郡ネ

トリー赤十字病院に勤務しての帰国で、彼女達は20～30代であった。赤道直下甲板上毎夜ビールを飲み友好を深めた。濱田は「澤木梢君の思出」(「三田文学」昭和6年2月号)で「三月二十二日、いよいよ人びとと別れを惜しみ、赤十字の諸嬢とも袂別した際、澤木君が『また何時お目にかゝれることでせうか』と言われた時、彼女らの一人は胸ふさがって声を放って泣き出したので、私どももみんな涙を誘はれた。これは一つは、われわれの間に当時、既に澤木君の痼疾について多くの憂慮を有してゐたからである」と書いている。

この辺のことを渡部誠一郎『俊秀澤木四方吉』には、「四方吉の薄い胸に何が宿っているのか、看護婦たちは職業柄、目ざとく見抜き、その行く末を案じて心を痛めていたのである」と書いている。26人中に秋田赤十字病院の大坂ツルノ看護婦(20歳)がいたと書いた渡部は、「大坂は現姓安達で、仙北郡飯詰村(現仙南村)の出身。後年、軍医学校総婦長を務め、現在は東京都大田区久ヶ原町五―一―一〇住」とある。この本の出版年は昭和60年であるから仙南村は美郷町である。

帰国直後の3月下旬船川港町に帰った。だが在英の小林澄兄宛手紙に「2週間の在郷は大部分感冒で弱った」とある。4月、慶應義塾大学学部文学科で美学を、予科でドイツ語を教授することになり、5月文学科教授を辞した永井荷風の後を承け、31歳で「三田文学」の2代目主幹となった。兄再吉の孫である当時鶴見大学坂本育雄助教授は「所詮、彼は学者にはなり得ても、作家になり得る人ではなかった」(『日本近代作家の道程』三青社・昭和59年)と論じたが、至言であると感じる。

6月三田演説会で「伊太利の旅」を語り、8月8日本籍地姫路市石川みね子と結婚。外国女性でないことを澤木家では喜んだという。姫路市北条口106石川武雄・とゑの三女で明治29年12月16日生まれの夫人の父は当時安田銀行秋田支店長であった。みね子本人は大正2年秋田高女卒、3年秋田女子師範学校本科二部を卒業し保戸野小学校訓導で、上品で音楽と書道に通じた大和撫子だった。

夫婦は10歳違いで、「あの時分こそ澤木さんの生涯の華だったかもしれない」と、船川をも訪れた教え子南部修太郎は「澤木さんの追憶」(「三田

文学」昭和6年新年号)と記した。新婚の住いは高輪車町で凝った普請に理想の調度が充ちていた。純情の夫を信頼し料理上手の若い新妻と婆やとの接待に来客も多かった。7年から美学美術史の両講義を担当し、8年9月から東京帝大で美術史の講師という私大教師では珍しい立場を体験する。

大正9年(1920)には新「大学令」によって慶應義塾大学文学部に設置の美術史科の教授に新任された。数えて35歳で彼の学力の深さ、評価の高さが知られる。11月19日には澤木家から分家した。

彼の授業は、『俊秀澤木四方吉』に引用の資料によれば、学生から見て、「周到な用意と不断の勉強の結晶」に基き、「純粹にノート」で「新しい学説を口授」の形式で、彼の講義の日は「朝から非常な期待」を持ち、済んだあと「一日こころの充実を感じて過ご」し得たという。逆に病気などで休講の際は、「落胆から、その日一日まるで空虚に思えた」と、「三田文学」の追悼特集号(昭和6年2月号)にある。少壮教授の秀才度には「講義に耐えられない学生」もいた。「愚への軽べつが人一倍激しかったから」である。

大正11年(1923)9月発病したために慶應も休講になり東大講師も辞職した。12年療養の為に神奈川県藤沢市鶴沼に転地した。住む家は親交のあった芥川竜之介の旧宅であった。俳句や書道に親しんだというが、9月1日関東大震災が襲う。家も欧州からの資料も失ったが、夫人のみね子と女中と共に松林に逃れた。翌13年3月20日鎌倉郡鎌倉町471に転居をし、10月25日には扇ヶ谷295-1に新築した和洋折衷の自宅に移った。

大正8年卒業の水木京太(七尾嘉太郎=横手出身)が関与していた「三田文学」が14年(1925)3月に休刊になった。永井荷風が退職以来義塾当局の予算が横這いで、原稿料も他所の半分位だったということなど影響したのかも知れない。彼澤木も悲観したようであるが、大正15年1月20日「三田文学」の復活が報告される。水上瀧太郎・久保田万太郎・小島政二郎・水木京太らが編集委員で、勝本清一郎が編集担当として4月1日復活した。親友水上の友情が復活を実現したのである。

この頃から、小泉信三の紹介で主治医となった武久徳太郎鎌倉医師会長の往診による手当てと、

愛情豊かな妻の献身的看病により、体調は恢復し演習の授業を開始した。顔色も黒くなり以前より肥ったという。だから「この点については非常に自信を持っておられた。私達も、先生の語られる一語一語に圧倒的な気魄の強さを感じた」と「三田文学」の相内武千雄「沢木先生」（昭和6年2月号）に記される。だが翌昭和2年病気は再び勢を強め、また自宅療養に戻らざるを得なくなった。

昭和3年父晨吉と兄再吉らの家族が、東京市世田谷区玉川田園調布2-710の澤木別邸に船川から移り住んだ。彼の近くに居たいという家族愛よっての移住である。だから次兄淳吉の娘たちも訪問した際に「秋田弁」は気にせず話せるといった。子供がいない夫妻は洋犬に衣服を着せていて姪達は驚いたという。

昭和4年(1929)1月25日に慶應で最後の講義を行う。本人は未だ続け得ると信じていたと考えられている。「仕事ができなければ生きていても仕方がない」と言っていた由なので、あのドームの美空ひばりを連想される如き意欲的な講義だったのであろう。

だが2年もせずに秀才教授の最期が来る。昭和5年(1930)11月7日肺結核で逝去する。数えて45歳、満43歳であった。午前10時息を引き取った。田園調布ら72歳の父は孫の隆子と駆けつけたが、『修證儀』を読み上げると一言も発せず帰宅、そこで「ああ、四方、いだわし」と慟哭したという（『俊秀沢木四方吉』）。

墓所は鶴見総持寺にある。昭和19年(1944)6月戦火激しくなった東京から澤木家は男鹿の本邸に戻った。やがてみね子未亡人が鎌倉から小石川の実姉の屋敷内に住居を移し、澤木家が船川に戻った戦時中は姪がそこに寄留していた。

37年(1962)11月三田演説会の主催で「沢木四方吉33回忌記念講演会」が開かれ友人小泉信三と高橋誠一郎は人品や学問を語った。慶應義塾の彼に対する評価がわかる。昭和50年(1975)11月9日未亡人は八王子の病院で脳血栓により世を去った。

井上 廣居

元治元年(1864)10月4日出羽国秋田郡久保田手形中新屋敷小貫久之進次男金之助が誕生した。

父は直前に世を去っていたため祖父東馬が訓育に当たった。明治5年(1872)小学校が開設されたが、金之助は数日登校したものの「幼稚だ」と通学を止めた。家庭の素読や塾での学習で「論語」「孟子」等も読んでいた彼が、片仮名の教科書では子供心にも意味を認め難かったのであろう。7年3月隣の井上家の13歳の嫡子福治が死去し後継ぎがないので井上家に入り戸主となった。これは兄亀松が前年発せられた徴兵令を体の弱い弟が避け得る途を選んでやったのだらうとされている。

結局平元謹斎の四如堂に学んだ。1歳上の保戸野の町田忠治、同年の檜山の田中隆三と共に「三神童」と称された。町田と田中は後の秋田中学になる中学師範予備科に進学した。「四如」とは宋の黄仲元の号だったので、年来「しじょ」と読んで来たが、四如堂から引継ぐところのあるという明德小学校では「しにょ」だという。謹斎は名は徳(たもつ)角館生まれの折衷学者、金岳陽の弟子黒沢宇左衛門重測(号は四如)が明德館教授となり、手形谷地町に文化年中に開いた塾が四如堂で、謹斎はその高弟である。徳の他に貞治・直・正などの通称もあり、諱は重徳である。四如堂に学び藩校教授や藩主の侍読などを勤め、西宮藤長(端斎)・神澤繁(素堂)・根本通明(羽嶽)などの弟子を育てた。戊辰ノ役に非戦論を唱えたため家禄は5分の1に減ぜられたこともあった。

その秀才少年金之助はやはり武骨人間ではなかった。体が弱く体育などが苦手なので学校を止めたのだとの説もあるらしい。明治7年私塾閉鎖令で四如堂も廃止されたが、12年(1879)9月教育令が出たのを契機に西宮・神沢らが努力し、13年2月手形新町下丁に四如学校を復興した。西宮藤長は角館の森田資剛の次男に生まれ、同地の西宮藤徳の養嗣子となった。明德館教授にもなったが、明治時代には15年(1882)に新設の女子師範学校の初代校長になり、秋田女子教育に道標を樹立した。

神沢素堂は手形新町下丁で胤正の長男に生まれ明德館に学び、明治6年(1873)には伝習学校に学んだ。13年2月西宮と再興した四如学校は、13年12月改正教育令により14年2月閉校となり、15年4月自宅に責善学舎を開いた。俊才井上少年は

この学舎の塾頭格で、師の代講もしたという。

明治15年秋に上京した。翌春には開校したばかりの東京専門学校政治経済学科1期生として入学した。その受験当日隣席に旧知の「秋田日報」編輯長上遠野富之助がいたので、5歳程年長の彼に「同郷のよしみで答案を多少融通してやった」（『秋田の先覚』4・秋田県）という。19年（1886）7月25日に卒業論文「教育者の待遇論」を書き政治学科24人中2番の好成績で卒業した。中央官途への就職の勧めもあったが彼は帰郷した。

この年はコレラが大流行し、下宿の前を戸板の死体が毎日火葬場に運ばれていた。卒業式にも葉瓶を携えた（渡部誠一郎『秋田市長列伝』・秋田魁新報社）という体調も考慮してのことであろう。ところが卒業3日前に俵屋火事があり秋田では3500戸余を焼失しただけでなく、秋田県も4800人も死亡したコレラ流行のほか、9月には台風被害もあったので故郷も平穏ではなかったのである。

明治20年（1887）5月特に職にも就いていない彼を大久保鉄作が訪ね、「秋田新報」の記者になり論説を担当して欲しいと要請した。実は「秋田日報」を経営難で潰してしまい、この頃漸く新しい金主を得たので、「秋田日報」（明治7年〈1874〉発刊「遐邇新聞」は11年「秋田遐邇新聞」と改題、14年に「秋田日報」となっていた）の精神を引き継ぎたいと説いた訳である。井上は受諾した。

21年12月時の青山貞県知事と秋田県会が対立した。19年（1886）2月元老院議員から秋田県令に赴任し、7月官制の改正で県知事となり、20年5月には男爵を授けられた知事は強気だったらしく、国道認定問題で21年12月県会は知事と激しく対立14県議が辞任した。知事は県会中止を強行して、22年（1889）1月21日内務大臣は秋田県会の解散を命じる事態になった。「秋田新報」は県知事の官僚主義を批判攻撃したので、1月29日知事は新報の発行停止処分をした。2月11日は『大日本帝国憲法』発布の日であったが、この盛典を報道できなくては新聞の使命を達成は不可能となる。急拠「秋田新報」廃刊「秋田魁新報」発刊の手続を取ったが、認可されたのは発布後で、2月15日第1号となった。

井上は2月19日責善学舎に「帝国憲法研究会」

を立ち上げ、20日付の社説では、県会解散中で議長が県民代表で発布の式典に参加できなかったことを「秋田は僻遠の地なるもまたこれ日本の国土なり」「同胞は愚頑なるもまたこれ帝国臣民なり」と宣言、「謹承すべき憲法発布の大典にひとり本県、その榮にあづかることを得ず。切齒扼腕」と嘆ずる名文を書いた。

現実では、明治19年正月宮中御講書始の儀に『周易』の御進講をした根本通明が在京県人をまとめ、700人の祝賀団を結成し祝賀の大旗を立て虎ノ門外に天皇を奉迎し、秋田代表の名義を表したという。井上はこの22年6月3日秋田魁新報社の理事に就任し主筆をなる。数え年26で師の素堂から受けた廣居（ひろやす）の名前に改め、また雪竹という雅号も師から受けた。

雪国住いの我々は「雪竹」はよく眼にする印象的情景であるが、廣居は『孟子』の書中の「居天下之廣居」から撰ばれている。元来広い居場所のことであるが、人物を表わせれば心が広大で安らかに徳が高いということになろうから、儒教理念の中核部の「仁」に当たる。師は愛弟子の人格にそれを見たのであろう。

後輩の記者にも当たる高田景次同社編集局長は「彼は自らは自分は弱くて『勇猛奮闘の精神に欠けていた』と反省しているが……激しい気はくが（論説の）行間に流れている。……一連の社説はまことに圧巻であり、秋田県の文化史上にも彼の真価を遺憾なく示したものと言えよう」（『秋田の先覚』4・秋田県）と評している。本県立博物館の先覚の顕彰は原則軍人や政治家を避けているように見えるが、続いて見るように政治家でもあった人を、館話に取り上げる判断の一つはこの文化史上の価値を認識しているからである。

更に後輩の記者渡部誠一郎論説委員長は「大久保（註・鉄作）の十分に推敲を重ねた洗練された文章に対し、井上のそれは勢いがあり、論理展開に鋭さとひらめきがあふれる。失礼ながら、とても二十四歳（註・満年齢）の風邪をひきやすく一日に何回も胃痛に悩む若者の文章とは信じがたい。天賦の才と、人知れぬ努力も秘められていたに違いない。……仮に大久保が誘わなくとも、結局は言論・報道の道に入っていたのではあるまい

か」(『秋田市長列伝』・秋田魁新報社)と論ずる。

そして、続けて渡部は「井上が政治の世界に初めて足を踏み入れたのは、秋田(魁)新報社理事、主筆当時の明治二十五年三月、第一期秋田市会議員の半数改選で当選したことによる」と解説して名新聞人が名市長になる出発点を記している。半数改選は今の参議院議員選挙のそれと同じであろう。周囲のすすめで10人宛3段階に分かれていた二級議員に、25年3月28日当選し、4月4日の初会議で副議長に選出され29年12月10日まで務め、30年1月11日には議長に就任した。

任期中の29年11月28日畠山社長が退任した後を受けて、31年(1898)11月27日に数え年35歳の井上後任社長が登場した。これから大正12年(1923)1月まで在任するのであるが、市会議員の任は31年3月29日一級議員に当選する。ところが兵營の敷地問題で12月6日議員辞職という事態になる。

しかし選挙で32年2月20日一級議員に当選し、3月11日議長となる。34年3月26日の半数改選では珍しく抽選に敗れ辞職するが、29日に当選。しかも5月29日都合により4期務めた市議議員を辞職した。新聞人に専念する為だったのかもしれないと考えられるのだが、36年(1903)に今度は9月25日定員31名の第15回県会議員選挙に出馬させられることになる。

当選したその任期中に、39年7月29日秋田市長候補に推される。だが当選したのは大久保鉄作で次点に止まった。

明治40年(1907)10月21日から44年9月24日までは第20代県会議長の任に就いたが、この間、県政では羽越鉄道や船川鉄道の誘致、船川築港、雄物川改修、秋田鉱山専門学校の創立など交通運輸と文教の面で大きな進展があった。

第二次大戦後になるまで秋田唯一の高等教育機関であった秋田鉱専は、日本においても唯一の鉱専としての存在感を誇った。明治40年7月の秋田における日本鉱業大会で開設の発案があって、それを受けて8月の県会で誘致決議が行われた。41年4月には設置決定があり、44年開校し、5月1日第1期生合格者57名の発表があった。落成式を挙げたのは大正2年10月1日である。

明治45年(1912)5月15日第11回総選挙に立候

補し、秋田市区で佐竹家家令大縄久雄候補と対決したが、395票を獲得し159票の大縄に大勝し当選した。大久保秋田市長は郡部選挙区定員6名の処で立候補したが、1529票で次々点であった。

大正4年(1915)3月25日の第12回総選挙にも、秋田市区から立候補333票を得、次点の田中隆三254票を圧倒した。また郡部区から出た大久保鉄作は次点であった。

この人気と信頼は井上に次の舞台を用意する。大正5年(1916)7月25日には安藤和風らの「同志会」の画策で秋田市長の第一候補第1位に18票で選出された。2位は現職の大久保市長で9票だった。本人は富士登山に誘い出されていて、その留守に支持工作されて30日に渋々承諾したという。同志会秋田支部長を辞任すること、次期総選挙候補者に推さないこと、任期中でも随時辞職できることの3条件を提出したという。市政を一党一派に偏するものにしたくなかったのであろう。

翌6年1月の解散まで衆議院議員も務めた。当時の制度では兼職が可能だったのである。8月18日に、都人の「都落ち」を惜しむ声もある中を帰郷して市長に就任した。公正不偏は直ぐ示された。

誰とでも会えるようにと市役所玄関右側の4坪程の室を市長室にした。市長は市民の公僕だからということであろう。「どう見ても、受付としか思われない。市役所に用事のある者が、案内を乞うつもりでドアを開けると、そこには縫い紋の羽織に折目正しきはかまをつけ、白足袋の威厳にみちた老紳士が端然と構えているので、何事も聞かず、戸を締めてそうそうとして逃げ去るのである」(武埜三山「井上広居」・「広報あきた」昭和37年9月号)、「やはり近寄りたがたい彼の威厳のためか、訪問者はそれほど多くはなかった」(『秋田の先覚』4)と後輩の記者市長に記される。

手形から現在の矢留町にあった市役所まで徒歩で通勤した。市内の実情を体感し市民に直接したかったのであろう。挨拶に答えるべく帽子に手を掛けた俣だったという。大正6年9月3日には明治以来の宿願だった雄物川改修工事が起工された。昭和13年(1938)4月27日完工通水という長丁場の事業となる。

井上市長の名は当然知っていたが、改めてその

卓抜性を理解したのは平成13年11月17日に「秋田大橋架替開通記念シンポジウム」の基調講演「秋田大橋と雄物川放水路の史的意義」（国土交通省秋田工事事務所『秋田大橋』所収）を行った際であった。新屋の合併、茨島の埋立てなどについての井上市長の画策の正しさと優秀さを認識して、是非その先覚者像を館話で紹介したいと意識し、此の段階の行政行動の原点は、「住み心地の良い都市」「整然たる大秋田市」を作り上げることで、それが為には附近の「町村合併」が必要と昭和2年の頃から表明していたことを知り、その先見性に感じ入ったのであるが、今回の館話で、どうもその発想は市長就任時からの識見であったろうと考えた。

大正9年(1920)7月30日2期目の選挙も総票数27の26票を得て選出された。業績への評価歴然である。13年7月29日の3期目も市会の25票満票で選ばれ、昭和3年(1928)8月26日の4期目の選挙では、22議員出席の議場で鈴木安孝議員の動議で湊鶴吉議長の推薦があり、満場一致の選出となった。この頃から唱えられた「大秋田市構想」は「仙台に負けるな」という理念に基くものとの長男井上勇談が『秋田市長列伝』に紹介されている。

満65歳も間近い昭和7年(1932)9月3日、当時秋田市長在任の記録である4期16年の任期満了して、「もう1期」という声も強い中淡々と引退したが、53歳で市長就任以来、市立病院・商業学校・上水道拡充・下水道計画実施・市章と市記念日制定・消防常備・職業紹介所設定・茨島記念運動場と第一野球場完成・新国道実現など大きな生活文化上の実績を示したので、満足感満ちたに違いない市長任務終了であった。

昭和11年3月秋田魁新報社中村重惇専務が、12月26日安藤和風社長が死去した。古巣の緊急事態に推されて再び社長に就任した。12年(1937)1月23日のことである。戦時となり業務多端であった。そして昭和20年終戦となった。公職追放の嵐が吹くことになる。21年(1946)1月予め社長を辞任し古村社長に引継いだ、共々追放となる。

やがて解除になり、昭和27年(1952)文化の日に「秋田市最高功労者」の顕彰を受ける。久保田城跡の御堀埋め立てや、八郎潟干拓には断固反対

したが、28年の佐竹義堯ミニ銅像再建には先頭に立って行動した。「仙台」への意識も或いは戊辰ノ役時が心の隅に在ったのかも知れない。『秋田市長列伝』には「男女同権を説いた」とあるが、平成18年(2006)7月7日の館話を終えて室に戻ったら、机上に受信されたファックスが載っていた。《一番下の孫》と自己紹介される新宿区藤原昭子さんからの便で、その中には「家にあっては祖父は当時の秋田の人々に比べ女性を大事にする気持が強かったようで、いわゆる男尊女卑の風が我が家及び親類にはあまりみられない」と書かれた部分があり、女性尊重は衆目一致のこのようである。

昭和31年(1956)6月5日午前93歳の長寿で逝去。墓所は蛇野の閻(てん)信寺にある。閻は湊(てん)に通じ、馬車の音などの盛な様を示す文字である。

安成 貞雄

明治18年(1885)4月2日北秋田郡阿仁合村官営銅山官舎で正治・キミの長男として誕生する。父は弘化4年(1847)1月19日長門国豊浦郡豊浦村に生まれ、文久3年(1863)8月5日の馬関戦争に17歳で出役、2歳年下の乃木無人と共に欧米4ヵ国艦隊の馬関砲撃に相対した。無人は後の希典で2人の仲は良かった。乃木は東京に出て明治4年(1871)陸軍少佐に任官していたが、正治は家の事情もあり、28歳の明治8年(1875)の上京で明治10年工部大学校になる工部省工学寮に就職した。その流れの中で15年機械工として阿仁官営銅山に赴任していたのである。

母は慶応3年(1867)6月3日阿仁の小沢鉦山村で棟梁の佐藤豊蔵の長女として生まれた。父豊蔵は日蓮宗に帰依していて日豊として出家したという。そして38歳の父と18歳の母が結婚した翌年に貞雄は生れたということになる。19年9月に弟の二郎が、21年10月には山本郡沢目村水沢鉦山で三郎が生まれた。その二郎が編んだ『年譜』によると、父が貞任・貞雄・貞宗の三つの名前を選んで神棚に供え、親類の老人が籤を引くと「貞任」が当たったが、貞雄が選ばれた。貞任は賊将だったからであろう。25年(1832)貞雄は阿仁合尋常高

等小学校に入学した。27年10月妹くらが生まれた。

父は間もなく山本郡東雲村に新設の古河製錬所の副所長に転じ、貞雄は向能代尋常小学校に転校し、初めて海を見た意識した。38年には能代港町瀟城尋常高等小学校高等科に入学した。渡船通学米代川は凍結するので冬期間は下宿していた。

明治32年(1899) 貞雄は秋田県第二中学校に入学する。そしていよいよその特性と能力を発揮する成長段階になる。そもそも秋田県では明治15年第一中学に当たる秋田中学校が開校し、31年に第二中学校の大館中学と第三中学校の横手中学が同時に創立される。その第二中学校の第1期生として32年4月に入学した。能代の親許を離れたのである。高等科2年修で進学する制で定員80人に108人が入学した。尚能代中学校ができるのは、大正13年のことである。108人中卒業できたのは68人であった。

33年2月弟四郎が生まれ、4月二郎が中学に入学したが、この年創刊の俳誌「俳星」に3号から「魯智深」の俳号で投句した。貞雄の自筆『年譜』は、「夏(34年)の帰省中、島田五空から日本派の俳句を学ぶ」と記した(伊多波英夫『安成貞雄を祖先とす』)。渾名が弁慶だったという貞雄の俳名に魯智深は相応しいかもしれないが、一般に用い知られていた俳号は「露臺」「路台」であった。尚魯智深は『水滸伝』百八傑で名は魯達で武芸各般に通じた隊長だったが、悪徳商人を殴り殺した為五台山に入り修行して花和尚と呼ばれた。背中に牡丹の刺青があったからである。

貞雄は「予は如何にして揚足取となりしか」(『文壇与太話』東雲堂書店・大正5)には1年生の秋に校長が招いた子爵渡辺昇武徳会長と弟子2人に、所定の面や胴や小手ではなく膝や脛を攻撃し、所定の仕合には敗れたが相手に大打撃を与えたことを述べている。第二中学校初代校長は弘前出身で青山学院出身、各地の校長を歴任し、期待のうちに招かれた教育者西館武雄であった。全寮制で寮費は月に5円から5円50銭ぐらいであった。第2号室室長の彼は煙草没収などに真面目に当たったという。

34年7月から大館中学校と改称されたが、彼は校内に「星秋会」をつくり主宰し、俳句作家とし

ても組織経営者としても素質と才能を発揮する。武道や体操以外は抜群の成績であった。それより先明治33年(1900)10月職場の大煙突の足場崩れで父正治が大怪我をし、これ以後不健康になる。それは一家にとっても不幸なことであった。

35年9月青柳有美教諭心得が大館中学に赴任した。ハイカラ教師で生徒に影響を与え、貞雄の文学志向にも作用した。青柳はクリスチャンで明治女学校の教師から来任したのであるが、郡長の給料50円よりも高い55円の給与を「心得」という教師が受けたのは西館校長が青柳の評判を知っていたのであろう。33年『恋愛文学』(春陽堂)が発禁になっていた青柳なので少年達には魅力一杯だったことであろう。青柳は貞雄の才能特に英語の学力に感心していたというから、彼の成長過程で有美の存在は大きな意味を持ったと考えられる。

35年秋、11日間の全校函館修学旅行があった。そこで新聞の誤報道から校長排斥運動が起こり、11月西館校長は辞任した。36年には4学年に進級した弟二郎が精神的なことが原因でか中学校を退学して古河精錬の事務職に就いた。5月1日貞雄は18日までの大阪博覧会見学修学旅行に出かけた。二郎の下の子は2年生だった。

しかし大館中学は騒動が続いた。西館初代校長後任に村岡尚功校長は冬休を挟む2ヵ月程の在任で前任校での事がらみで更迭となり。3代目三宅直温校長の代になっていたが、5月28日に多数生徒の無断欠席事件があり、校長の訓戒にもかかわらず期末試験をボイコットし処分された者が出て、校長と生徒の対立が深まり10月29日同盟休校に突入し、全校生徒が三宅校長の退職を要求した。貞雄は代表2人の1人として秋田県当局に陳情する役目まで果たしたので、学校側が13人の停学を命じた中に含まれた。県も介入し能力を欠く校長は休職となり、横手中学校長から小山忠雄が4代目校長に赴任11月9日から授業は正常化し、停学者もこの初の県人校長のもとで37年(1904)1月7日に処分解除となつて、3月には中学校を卒業した。

4月、父の希望は高等工業学校入学であったが、理科は不得手でもあったらしいし、文科の才能に秀いでいた彼は、早稲田大学予科に入学し英文

科を専攻することになる。ところが8月2日、怪我の2年後には上京して北里柴三郎の養生院に半年も入院、母は幼弟四郎を伴い看病に同行していた。翌年4月末に帰郷することは出来たものの、健康を取り戻すことはなく58歳で死去した。家族は小坂鉦山にいた父の異母弟中西周輔叔父の許に身を寄せることになった。

38年(1905)「早稲田社会学会」に参加し、宮田脩のトルストイ研究会にも加わった。幸徳秋水らの平民社にも出入りし活動に連携した。家庭の事情も関連したのであろうが、家族はこの年9月5日に上京した。ポーツマス條約に不満の東京市民の日比谷「焼討ち」の当日である。20日頃に四谷区四谷片町46番地の借家に一家で住んだ。

明治39年(1906)牛込区に移り住んだ。8月に父の遺骨を本籍地に葬った帰途、平民社に出入りして知り合い親交のある荒畑寒村を訪ねる。寒村は管野すがの家に同居していた。9月11日東京市電の電車賃値上げ反対運動で禁止のビラを配布して1晩警察に留置された。寒村と一緒だった。荒畑は明治20年横浜に生まれ本名勝三で、高等小学校卒業後キリスト教の洗礼を受け海軍工廠見習工となり堺利彦・幸徳秋水ら反戦運動に共感し、平民結社をつくり、38年社会主義宣伝伝道の行商をする。6歳年長のすが(筆名須賀子)と同棲したのである。彼女は鉦山業の義秀の長女だったが、父の事業失敗で東京深川の商人と結婚したものの22歳で離婚し、宇田川文海に師事した。

嘉永元年(1848)江戸本郷生れで本名棄三である文海は、秋田とも深い関係がある。明治7年(1874)「遐邇新聞」記者になったのである。8年秋阪神に移り記者から作家になった。管野は文海により「大阪新報」記者になるが、文海の妾のような立場になり、反省からキリスト教に傾き、やがて社会主義者になっていた。同棲していた寒村は41年赤旗事件で入獄する。その入獄中に菅野は幸徳秋水と同棲してしまう。そして44年(1911)大逆事件で刑死する。同棲癖は貞雄の家族生活嫌悪と対極的である。寒村は大正年間日本共産党創立に参加し、昭和20年の終戦後日本社会党結成を計画して、21年から23年まで衆議院議員となる。

貞雄は、39年(1906)既に7人の学友と「北斗」

という回覧雑誌を始めており、40年には隆文館で「新聲」の編輯に携わっており、41年に早稲田大学を卒業すると「二六新報」記者となった。卓越した語学力で外国文壇情報などの文章を「早稲田文学」等へ書き、翌42年には「万朝報」の記者に転ずる。第一面の科学記事翻訳を担当語学力を発揮する。元より文学の才は豊かなのであるから「サンデー」6号に「巴里探偵譚・泥棒の泥棒」という翻案物を書いたが、この明治42年の作品が、彼の有名なアルセーヌ・ルパンの日本における《本邦初登場》という。文学の能力はこの新聞の呼び物である懸賞小説の審査においても、1週1回の敏腕発揮となって表われた。出獄後生活手段のない寒村の作品を当選させて援助したという。

明治43年(1910)秋、「実業之世界」編輯長になる。住居は四谷区荒木町で、弟二郎は「二六新報」の記者、三郎は台湾製糖勤務、妹くらは成女女学校の生徒、四郎は暁星小学校生であった。編輯長になる以前のことであるが「実業界を革新するに足る科学的操業管理法の案出」なる米国紹介の論文を書いて注目され、更に「東北発展号」の下調のために秋田にも向った。1月7日から24日まで福島経由で帰秋した。小坂鉦山の中西叔父の家では1週間も寝転んで懶けていた。単に親類に甘えた訳ではない。

44年3月には本格的取材で秋田に入ったのに、動いた気配もなく、4月13日の「秋田魁新報」が初めて動静を報じた。石橋旅館に止宿していた。5月1日秋田魁新報社の25周年祝典で46歳の安藤和風主筆に20代後の彼自身の見識を語り、主筆に対し西洋で保守的な英国の雑誌のことも、仏蘭西の積極的な他国書籍翻訳のことも語り、仏語学習の必要性を指摘した上に、入手した露西亜の本については「追々翻訳して差上げよう」というほど積極的姿勢を示した。懐郷心のようなものがあつたのであろう。ところで和風も「安成路台氏」と名を記して報道していた。お互が俳句の世界で相互理解していたのであろう。前述の如く今回の秋田取材は怠惰の限りであった。単に宿で寝転んでいる怠りだけではなく、時間があれば川反はじめ遊興の巷に出て、「毎夜必ず女を買う誓いを立てて実行し」ていた(荒畑寒村「悪友行状記」『随

筆』昭和26年6月号)という有様(『安成貞雄を祖先とす』に拠る)というのであった。時代がそれをさせたのかも知れない。

取材の予算も消費し尽し当然取材成果は無く帰京した。滞在中に受けた東京からの催促にも全く応答などはしていなかった。友人の野依秀市社長としても臆首することになる。暮になって「やまと新聞」に入社した。明治45年には泰西文芸映画の上映興行などをしたが収入は不安定で、原稿執筆でも恒常的収入はないので貧窮の生活であった。業界の女性との付き合いは変らなかったというが誰とも結婚はしなかった。

大正3年(1914)6月実業之世界社に再入社する。秋田での浪費怠惰を怒って寒村に「親友である以上、君も責任を分かすべきだろう。僕の迷惑を考えたら忠告するのが友人の義務である。さもなくば安成を告訴する」と言った野依社長が入獄したからであり、安成は社長代理の任に就いた。周囲のその能力評価の高さが察知できる。

4年のことである馬場孤蝶が総選挙に立候補した時それに関与して、応援演説もした。孤蝶は「民族の興隆」は「各個人の充実」だという主張であったが、同じ文学者仲間である相馬御風は自然主義文学についての閉塞感から、自己主義的な見地から、選挙制度下で運動するのは妥協であり屈従で墮落の門戸だから、「純潔な」「根本的な」戦い即ち革命のような戦いが必要だと批判した。

選挙実行派はこの御風の立場を非難した。安成は「読売新聞」に「相馬御風君に問ふ」という第一から第十までの質問を書いた。御風も答えたが、大方の対応は明治16年生まれで、本名昌治で早大出の詩人評論家御風に与せず、結局大正5年(1916)に『還元録』を発表新潟に帰郷してしまった。中学生の頃御風の良寛に関する文章を読んだが、彼が社会主義者だとは感じられなかった。孤蝶は29人の立候補者中末尾から5位で落選に終わった。

この学力もあって、あの新渡戸稲造『武士道』までも無知と無識だと批判攻撃する力もある安成が、この大正5年8月に刊行の『文壇与太話』が唯一の著書であるというから驚く。しかも「遊蕩文学撲滅不可能論」というものを書いて赤木桁平との文壇論争を招いたりする。毎夜女体を求めた

とかいう行動を併せ見ると、もう凡人の理解を超えているということになる。

大正7年(1918)コカイン中毒治療のため順天堂に2ヵ月も入院したという。どうして麻醉薬中毒になったのであろうか、これもやはり常識的ではない生活で精神が疲れていたのであろうか。大正という時代がそうさせることを可能にしたのであろうか。退院後11月から西日本放浪を半年程も続けた。何か不安定な状況とか雰囲気とかというものがあつたかも知れない。

9年(1920)野依社長の出所で「実業の世界」に復社している。ただ10年の1月野依社長の大分県中津婦省に同伴し、父の本籍地長府を1人で訪れ叔父中西周輔に会ったりした。

12月なると軽い脳溢血を患い鼻から出血することがあった。11年には腎臓病にかかり伊豆下田で転地療養をした。そこでは弟や妹くらの娘の幸子の気遣いや助力もあった。

12年2月39歳の貞雄は15日に長府に赴く。叔父周輔が死去して弔問したのである。そこまでは通常のことであるが、それからはやはり特異である。長府には父の遺産の田地と山林があつた。彼は小作人の小作料を二俵だけ割引いたというが、叔父が亡くなるに当たって弟二郎に呉れた200円も、残った叔母から受取ったのみならず、山の本まで売り払って4ヵ月間もの九州旅行に出て資金を使い果たした。その中で佐賀県唐津の神集(かしわ)島のドルメンなど考古学への関心も示していたが、長い原稿を書いたのに神集島の分以外は新聞社が紛失したと伝えられている。

東京に戻った仕事の方は、翌年の関東大震災で「実業之世界」も被災し、大阪で編集業務をやることになる。妹くらの夫高見基夫も亡くなった。

大正13年(1924)盛岡に面識もない高橋是清の選挙応援に出かけたりしたが、7月23日の午前脳出血で死去した。40歳で選挙後93日である。24日の納棺の際に母のキミは「今度生まれるときは長生きするように生まれてこいよ」と泣いたという(『安成貞雄を祖先とす』)が、正に短命であった。池上本門寺の墓碑には弟妹が《安成貞雄を祖先とす》と刻んだ。彼の存在の大きさが伝わって来る。